

## つくばね vol.24no.3

## ● 目次

## I 雑感, 体芸図書館

## 4 利用者の声

## 4 私の一冊

## 6 国際交流コーナー・地域情報コーナーを知っていますか?

## 7 Ask Us としょかんミニガイド

## 8 本学教官寄贈著書紹介

## 9 とびっくす

## 10 掲示板

## 雑感, 体芸図書館

阿部 生雄

自分の専門以外のことを書くということは勇気を要するものだ。私生活の吐露ならまだしも（この方が勇気がいるかもしれないが）、大学図書館の広報紙に何か図書館に関することを書くとなると、少々どころか大いなる覚悟がいる。図書館については全くの素人だし、今まで、一利用者としてしか図書館を捉えてこなかったからである。たまさか図書館運営委員、蔵書構成委員等に任命されても、常に、一利用者として、図書館の機能や構造を考えてきた。しかし、先号の『つくばね』(vol.24, no.2)で、医学系の高田彰先生は、きわめて野心的な医学図書館の将来展望を披瀝された。しかし、自分の領域、つまり体育・スポーツ科学で、体芸図書館に一体どのような将来展望があり得るのかを自問して慄然とした。その将来的な姿を展望できない自分に気がついたからである。付け焼き刃で体育科学系にとっての体芸図書館の将来図を描いても仕様のないことであるが、この際全く個人的に、体育科学系の一利用者にとって「都合のよい」体芸図書館とはどういうものなのかを夢想してみるのも一興と考えてみた。

体芸図書館には、日本で最初の体育指導者養成機関であった体操伝習所時代（明治11年設立）から東京教育大学体育学部時代に至るまでの、体育・スポーツ関係の本が所蔵されている。この本の蓄積こそが、わが国の体育学の足跡そのものを示している。体育・

芸術図書館（体芸図書館）が開設されたのは1974年7月1日のことである。医学図書館の開設（1978年1月5日）と中央図書館の開設（1979年10月1日）に至るまで、体芸図書館は筑波大学で唯一の図書館として機能していた。このことは、いわば「旧」中央図書館が体芸図書館として譲渡された、とみることもできる。つまり、「新」中央図書館が新設されてはじめて、体芸図書館は独自の機能を獲得したともいえるからである。聞き及ぶところでは、全国の総合大学で、体育と芸術のための図書館をもっている大学は筑波大学を除いて存在しないという。全国の体育や美術の専門大学には、図書館、時として美術館を擁する大学も存在しよう。しかし、筑波大学のように中央図書館、体芸図書館、医学図書館という三つの図書館が専門性を維持し、有機的に結合している例はめずらしいという。こうした筑波大学固有のシステムを何とかして最大限に生かしたいものである。

筑波大学に1985年に赴任して、愕然としたのは、体育・スポーツ関係図書の購入状況であった。その頃出版されていた本があまり整備されていないので、体芸図書館の主任専門職員の方に体育科学系の図書購入状況と、併せて日本体育大学の図書購入状況を調査してもらったことがある。目を覆わんばかりの調査結果であった。一概に購入冊数が少ないか

ら悪いとは言えないが、1984年度は732冊（和書339冊，洋書393冊），1985年（11月まで）は558冊（和書289冊，洋書269冊）であった。開設年度から1985年度における図書購入冊数の平均は，533冊であった。一方，日本体育大学では，1983年には10,090冊（和書4,520冊 洋書5,570冊），1984年には9,185冊（和書5,712冊 洋書3,473冊）で，1975年から10年間の図書購入冊数の平均は，約8,300冊であった。日本体育大学では，体育・スポーツ関係以外の本も購入しなければならないから，この数値の解釈には幅があるが，それは筑波大学の体育科学系が購入した図書の約15倍であった。この傾向には，当時あまり慣れていない図書の「中央管理システム」の影響もあったように思う。自分の研究費で購入した図書の専有的利用というシステムに慣れてきた者にとって，専有冊数の制限は，図書購入の意欲を殺ぐ場合があったからである。このデータを当時の学群長であった金子明友先生（現在の日本女子体育大学学長）に示し，何らかの善処を検討するように働きかけた。その結果，学系予算の5%と，各教官の研究費の一部を拠出してもらい，年間約500万円に及ぶ学系共通図書費を設ける制度が実現した。現在，日本体育大学の図書予算は，1億円を越えると聞き及ぶ。この額は，「対抗する」という次元を超えており，われわれが考えるべきことは，厳しい予算枠の中で体育・スポーツ科学の特色ある図書構成をしつつ，他の同類の図書館と有機的，補完的，互惠的なネットワークを構築する点にあると思う。

体育やスポーツは，日本十進分類法（NDC）でいうとスポーツ・体育（780）と諸芸・娯楽（790）にまたがって分類される小さな領域である。これに対して，芸術は，芸術・美術（700），彫刻（710），絵画（720），版画（730），写真（740），工芸（750），音楽（760），演劇（770）に分類される。必ずしもNDCの分類がその学問領域の専門分化を反映しているとはいえないが，こうしてみると，芸術は，体育・スポーツの分野よりも細分化されて分類されているといえよう。しかし，体育・スポーツの研究領域は，ほとんど全学問

領域にまたがっているといっても過言ではない。ちなみに，体育科学系は，体育学，運動学，体力学，健康学の4つの研究分野で構成されており，体育学分野には体育哲学，体育史，スポーツ人類学，体育社会学，レジャー論，体育経営学，体育心理学，体育科教育学，特殊体育学，武道論といった研究領域がある。運動学分野には運動学，トレーニング学，体操，体操競技，陸上競技，水泳，バレーボール，サッカー，バスケットボール，ラグビー，ハンドボール，野球，卓球，バドミントン，テニス，剣道，柔道，弓道，舞踊，野外運動がある。また健康学分野には，応用解剖学，健康生理学，保健環境学，健康管理学，学校保健学，栄養学，スポーツ医学を研究する領域がある。体力学分野は，運動生理学，運動生化学，運動力学，体力学，測定評価学の領域から構成されている。これでも更なる専門分化と多様なスポーツ種目に対応できない。こうした多岐にわたる領域の図書や雑誌を網羅的，かつ完全にカバーすることは困難なことである。しかし，それぞれの研究領域で，意識的に図書の充実を図ることがなければ，体芸図書館の最も根本的な機能を維持することは出来ない。図書の充実，これは図書館の王道であることを忘れてはならないだろう。

その一方で，筑波大学が先駆的に取り組んでいる電子図書館の充実を図る必要がある。現在，図書や資料の検索，それらの所在の確認，といった側面にとどまらず，研究内容の入手にとって，電子図書館はきわめて重要になってきている。博士論文への接近，雑誌，アカデミック・ジャーナルや紀要等の掲載論文は，インターネットを通じて迅速に入手可能となり始めている。また，研究上の様々な情報がネットワークを通じて入手可能となっていることから，筑波研究学園都市の研究機関は勿論のこと，国内，国際における関連研究機関のインターネット情報，ホームアドレス等を利用者に提供する必要がある。スポーツの領域にひきつけて言えば，例えば，ドイツのケルン体育大学図書館とそのスポーツ・ミュージアム，スイスのローザンヌにあるIOCのオリンピック・ミュージアム，カナダのウエスタン・オンタリオ大学にある国際オリン

ピック研究センター等には、情報量に満ちたホームページがある。

しかし、インターネットによるネットワークの真の充実、ホームページの充実、なにかんずく、情報の開示と提供にある。この意味で、体芸図書館の独自性は、固有のホームページを持ち、体育・スポーツと芸術に関する研究成果と個性ある作品やメッセージをいかに集約的、恒常的に発信できるかにかかっている。イギリスのスポーツ史学会のホームページはインタラクティブである。例えば、そのホームページにアクセスした者が紹介したい論文を書き入れることが可能で、文献リストが補完されつつ、全ての者によって構築されていく。もし、体芸図書館に体育科学系と芸術学系との双方向的で集約的なホームページができれば、図書館と研究室との価値あるネットワークが形成されると思う。体育科学系と芸術学系の先生方の日常的な研究活動の中から、世界に向けた学術的情報の構築と発信がなされることが望ましいのである。その日常性の将来に、筑波大学における体育、スポーツ、芸術の総合的なデータバンクが展望できる。

体芸図書館の基本は、あくまで、関連図書の収集を主に目的とする図書館でなければならないが、体育・スポーツは演技的、技能的要素をもつことから、映像資料の体系的収集が重要となる。また芸術学系では、日々制作されてくる作品そのものが、収集の対象となり得る。絵画、彫像、書画、デザイン、写真、ビデオ、映画等の他にも、スポーツの領域でいえば、表彰関連資料、大会関連パンフレット、スポーツ用具等が、体芸図書館の収集すべき重要な対象となる。また、体育、スポーツ、芸術の領域で活躍された当大学に関連の深い人々の記念物、作品等の収集も重要な課題となろう。「図書館」が「ミュージアム」に接近することになる。芸術とスポーツは、「見せる」ということを重要な要素とするため、両分野の統合を図ろうとする体芸図書館は、この「ミュージアム」的機能を重視しなければならない。「ミュージアム」機能の軽視は、体芸図書館の固有性の喪失につながりかねない。将来、芸術学系で大学美術館を展望することもある。しかし、その実現の途上

にあつて、体芸図書館における「ミュージアム」化は、辿らなければならない道筋である。

従来、体芸図書館は、芸術的な作品の展示やテーマ別の展示を企画してこなかった。この点、1998年9月7日から10月16日まで、教育学系と附属図書館の共催特別展『近代教育学の源流～コメニウスからフレーベルまで～』は重要な先例となる。体育科学系、芸術学系がそれぞれの、あるいは共通のテーマを設け、附属図書館（体芸図書館）と協同で、展示を試みるということがあつてよい。いや、むしろそのような企画こそ体芸図書館の存在意義を示すものと考えられる。「スポーツと芸術」、「近代オリンピックと芸術種目」、「スポーツと肉体美」、「スポーツと映像」等々、多くの魅惑的な共同テーマが待ち受けている。規模は小さくとも、個性ある展示が体芸図書館に実現されれば、そのパンフレットや電子化された情報は、筑波大学の学生や教官を越えて、広く世界を駆け巡る。より魅力的な体芸図書館が作られることになる。その実現のためには、3年毎に部署を移動するライブラリアンも必要であるが、体育・スポーツと、芸術の分野に取り組む、「学芸員」のような専門的なライブラリアンの養成を考えてゆく必要がある。

筑波研究学園都市は、ある意味で、フランシス・ベーコンが夢想した『ニュー・アトランティス』に出てくるベンセレム島に似ている。その島にある「ソロモン館」は、筑波研究学園都市の研究所や筑波大学に似ている。多くの研究者の集まるこの館は、科学技術を中核に据えたユートピアである。世界の人々に知られていない島国を想定したこの未完のユートピア論では、十数人の研究者が世界各国をめぐって、最先端の知識を十余年かけて収集する。今日で言えばインターネットによる情報の収集というところである。しかし、高度な知識を取り入れ、誰も知らない島国で最先端の技術を発達させても、それを世界に還元することはない。いわば閉ざされた科学ユートピアである。筑波研究学園都市のソロモン館たる筑波大学は、最先端の科学と学問・文化を発信する開かれたユートピアを目指したいものである。

（あべ・いくお 体育科学系教授）